

「松本市文化芸術振興審議会」第3回審議会の議事概要

- 1 日時 平成27年9月10日（木）9時30分から11時50分まで
- 2 場所 大手会議室A（大手事務所6階）
- 3 出席者 （委員） 笹本会長、山根委員、小松委員、宮嶋委員、瀧沢委員、倉澤委員、佐久間委員
（事務局）久保田文化振興課長、原文化振興課課長補佐、村井文化振興課係長、小林主査

4 議事等

- (1) 開会
- (2) 配付資料説明
- (3) 議事

ア 文化芸術活動の環境の整備及び充実

～若年、中堅世代の活動参加を促す環境づくり～

【委員】

- 「活動環境に恵まれていると言えるが」というのは何をもって「言える」と言っているのか。

【事務局】

- 前回「松本市の現状と課題」で示した部分。地区公民館が36あり、文化ホール・美術館についてもある程度整っているという施設的な整備の状況と、公民館については事業もかなり行っていることからそのように表現したもの。

【委員】

- 公民館がたくさんあるということだけで環境に恵まれていると言えるのか
- 直接行政として仕掛けられる部分と環境の向上として支援できる部分を明確に分けて考えていくことが必要。他自治体等に比べると公民館でやられていることはそれなりに恵まれてはいると思うが、そこがわかるように書いた方がいい。若年中堅世代の参加を促すのは人の存在。活動に参加している人数が多ければいいのと活動が活発かどうかは関係ない。本当に動けるスキルのある、コミュニケーション力のある人を松本に張り付けることが大事じゃないか。
- 設備の問題もどこまでやってると明記した方が市民にわかりやすいだろうと思う。
- 若年中堅世代が文化芸術活動に参加するというのはどういうイメージなのか？

【事務局】

- 基本計画策定にあたって市民の意識調査を行ったところ、20代～50代の活動参加が非常に落ち込んでいた。市としては文化芸術活動を行うことによって、

職場や年齢を越えた関わりの中で、アイデンティティの形成やこれからのコミュニティ維持という意味でも必要ではないかと考えた。

また、若年中堅世代は子どもを持つ世代なので、文化芸術活動に親も関わることで子どもも関わり、誰もが潜在的に持つ創造性を発揮できる可能性が出てくる。

また、「楽都松本」文化芸術の都松本の維持発展を考えると、やはり底辺からの広がりが必要だろうという認識

【委員】

- その世代は子育て等で忙しい。今は共稼ぎが一般的なので理想論と現実論はまったく差があるだろう。芸術は基本的に個の問題だと思うので、コミュニティや社会参画というのも違うと思う。では、若年中堅世代の参加を促すための取組みに対してどうしたらいいか。なぜ若年中堅世代なのか。
- 感性のつくのは小学校4年生くらいまで
- 年輩で活動をしている方は知識や技術があるのでそういう方に伝える側になっていただく流れを作ると浸透していくのでは？
- 若いうちに育成のための状況をやって年齢を重ねてからそれをもう一回やるための創出的な部分を市はどのような風にやっていったらいいのか。行政だけの問題ではなくて市民の側で問題意識持てるような作りが必要。
- 仕事をしていて中々時間はないが、文化芸術に触れられる何かがあればその先の健康、精神的な健康も含めたものに影響を与えられるのでは。触れる機会を増やす若年中堅世代の活動参加はとてもいいアイデア。時間帯も夜やるようなイベントがあってもいいと思う。
- 美術館や芸術館でワークショップを土日祭日などに設けてお父さんお母さんも参加できて子どもさんの感性を養う。そういうことが仕事で中断していても将来的に時間ができたときにまた再開してみようということに繋がっていくのでは？
- 活動環境に恵まれているというのをもっと具体的に書いてほしい。それからウ（ア）b、時間帯を選ばない活動環境づくりの検討。限られた時間でなくて積極的に今までの時間帯と違うものをやると。大きな文章的な部分としてはその辺を直して欲しい。若年中堅世代はなぜ入れないかということ的前提に考えると社会を変えないといけない部分があるが、やれることは何かを政策的に考えていく必要がある。公民館は文化活動をむしろオープンにするという方策が参加させるために必要。これから観光行政が世界的になってくる中では観光に来た人たちも講座に入れる体制をつくっていく必要もある。
- リサーチは大事。例えば習字教室がどのくらいあってどのくらいの利用状況かと。ピアノ教室がどのくらいあってどう変わってきたか、情報を把握する環境を整備することも大事
- 四賀に化石館というものがあって、ここでは化石を100%持って帰れる。そ

の価値がうまく伝われば恐竜博物館は人気なので人は来る。例えば昔の話を聞きながら1300万年前の化石を拾って来れるという楽しみ方を提案するとか。どう感動させるかというのは大事だと思う。講座も、一般の方と専門の方と子どもたち向けに3つくらいの講座に分ける。行く気にさせるものが眠っているはずなのでそれをうまく表現する必要。

- 芸術に関する論点では1つは現状把握がしっかりされていないこと、もう1つはきちんとした広報や関心づけるキャッチコピーがないこと。2つの点が課題だ。無関心な人を含めた現状把握の中に「なぜ来にくいのか」のヒントがあると思う。

イ 活動機会の提供・充実（発表機会）

【委員】

- 楽都松本の仕組みづくりはぜひやってほしい。ただ、公的な機会が少ないとは思ってなくて、声を上げやすい環境が増えることなど、意識に少し働きかける必要がある。発信したり色々やっても中々協力者が集まらない。リーダーシップを取る人を集める活動などからやっていく必要があると思う。
- 信大の地域プロデューサー養成ゼミと協働して、市民の中からプロフェッショナルな人たちを作ることできる。

【委員】

- 私たちはここまでやりました。ここから先はできないので市がやってくださいと市民からの要請があったら市はすぐに動くというシステムが大事だと思う。
- 芸術文化祭や市民祭は発表したくなる場所ではない。それなら公的な機会はないと思う。松本で演奏したいんだ、あの橋の上で演奏したいんだというイメージを築きあげることができると「楽都」になってくる。
- 特定ジャンル・団体に偏らないと書いてあるが、動いていない人を動かすとともに動いている人がさらに動ける環境をつくるのが大切。クラフトも情報をちゃんと集積してそれを発信する顔になるところがあるといい。今の施設がそれを目指してくれれば一番お金かからなくていい。
- 個人的に活動したい人を受け入れてくれるところや相談に乗ってくれるところがない。私は20数年前、クラフトフェアが始まった頃に自分の作品を持って参加したが今はハードルが高くなって参加することはできない。全国から人を集めるということは意味があり素晴らしい事業だが、行っても知り合いには会わない状況。市民が少しでも出品できる受け皿があるといい。
- 活動の提供・充実性に関しては市民の声を気軽に受け止めてその上で対応できる方策をきちんと考える。市民が主役であるということをもう一回考えたい。私たちの市の文化をあげるというのは観光向けの話だけではないというのを入れ込む。機会・発表のあり方も市民の側から声をあげられる体制を作っていくというのを文章

に入れて欲しい。それをやっていくためには普通の人或いは子どもたちを含めて鑑賞の機会、参加できる機会これをどうしていったらいいかという点だと思う。

ウ 活動機会の提供・充実（鑑賞機会）

【委員】

- 若い人たちが美術館に行かないのは、ひとつには幼い時に美術を楽しむ教育がされてないのと、もうひとつはお金がかかる料金的な部分はだいぶある。全部無料にしなくても終わった後に若者に開放するとか特別日設けるなど、無料の日を作るのが理想だと思う。
- （3）に「無料又は低額でのきっかけづくり事業の充実」と書いてあるが、それは市民の日なり文化の日なりをそうしますと謳いこんでやるような方策が必要
- ターゲットを絞った無料化というのものもある。高いものだからこそ無料だから行こうと思う。
- 音楽について言えば触れるきっかけが少ない。松本駅の駅前広場などをうまく使えたらいい。一定以上のクオリティは必要なのでそういう人たちは積極的に演奏してもらい、多くの人に興味を持ってもらうきっかけになり、演奏する側はそこで演奏できることが目標になる。
- パリの街は地下鉄で演奏するのにオーディションしてそれを市が宣伝している。それを今京都が真似して地下鉄で同じようにオーディションして発表する場を与えている。松本駅を降りて音楽が聴こえてきたらやっぱり松本はクラシックだなと思うかもしれない。聴く機会・見る機会があるというのは大事
- サイトウキネンで行っている子どものための音楽会はよい取り組み。松本の音楽レベルが高くなったのは最高峰のものに接する機会が一因かもしれない。そういう場の提供も大事
- 博物館や美術館は興味がないと普通の人には行かない。保育園に通う自分の子どもが時計博物館に行くととても楽しかったと言うので家族でもう一度行った。子どもの興味を引くと親も必然的に足を運ぶ。
- 無料が当たり前になってしまったら興味がなくなる。子どもと一緒にいくと安くなるかマネジメントが必要。どういう人に来てほしいか、来やすい環境をどう作るか料金体系のデザインを総合的に考えていく必要がある。

街なかの音楽に公共のスペースを使えるお墨付きを与えるということは効果的。誰でもできると市民活動の音楽も育たないのでモチベーションをどう提供できるかどうか。公共が認めたんだといういい力学をどう把握し運用するか。行政側が直接仕掛けられるところをテコにして他の文化活動に広がるような文化振興政策を
- どうしたら行く側が行きたくなるような装置になるかをもう少し考え、それをで

きたら文章の中にも入れたい。

- その波及効果もちゃんと組立てること。

エ 各種文化芸術活動促進及びそのための支援

【委員】

- 長野市に倣った形だが、実際うまくいっているかどうかという情報はるか。

<事務局>

- 今年度からなのでまだ把握できていない。考え方として特定補助のようになってしまっていた部分をメリハリをつけていこうということで整理したと聞いている。

【委員】

- 部門を分けてやるとしたら、元からこういうことやりたいからこの部門に応募したいですとそういう感じでやるのか。

<事務局>

- 部門を分けるかどうかも含めてそこまで制度設計はしていない。ただ対象をもう少し広い制度にして、コンクールに出る団体だけに与えるというような形にしないという提案

【委員】

- クラフト講座で若手の人たちに何が必要かと聞いた時には、作業する工房と販路だと言っていた。空家などとも連携しながら活動するのを支えていくということも入れたい。
- 活動に費用を出すというのは大事だと思う。いままでなかったとは知らなかった。
- 補助はある意味両刃の剣で主体性を削ぐ。自主的にやってきた活動が補助金を出した途端に崩れることもある。どう整理してやっていくかというのはとても大事で補助金だけではなかなか振興にはならない。
- 長野市の場合を見ると基金が原資のようだが松本市もこういった基金を作るのか？

<事務局>

- 基金については昭和59年に松本市芸術文化振興基金というのが設置されて既にある。今の基本方針の中でも市民や企業等に広く寄付を呼びかけ幅広い活動芸術団体に対し企業からの寄付を行うというのが書かれているが、実際には信州・まつもと大歌舞伎の事業収支で黒字になった部分を寄付金として受け入れているものが中心となっている。歌舞伎は隔年なので次回にそこから市民活動の事業に対して繰出金を出すというやり方をしている。文化事業分としては残額2500万円。歌舞伎以外と限定すると80万円が残高だ。支援策をやるとなると市として独自の財源があるわけではないので、基金の活用を考える必要がある。

【委員】

- 大歌舞伎をやって出た黒字の部分を基金に積立でているということか？

<事務局>

- そうだ。あと、同じ基金の中に教育関係に当たる部分、美術館とか博物館とかの建設に当たる部分を市で積立をしている部分があって、この基金自体も残高としては大きな金額となっているが、そのほとんどは施設整備を目的とした積立

【委員】

- 個人的な意見だが大きな金額は大きなものに使うというのも必要だと思う。美術品というのはお金があるから買えるというのではなく巡り合せ。だから小さな助成金をどんどんやるよりもある程度目的意識をちゃんともってやらないと使えないだろうと思う。
- クラフトが通年で行けるところ見るところがない。場所づくりというものの支援は市はどう考えているのか。建物を作れと言っているのではなくソフト面でできることがあると思う。
- 今のは施設運営のあり方というところにも関わるので次の論点にいきたい。

オ 施設運営のあり方

【委員】

- 施設運営といっても最終的には「人」の問題だと思う。専門性を高めソフト事業に重心を置くという時は、そこで企画立案して実行するまでに数年かかるので長期でビジョンをもってきえるように希望

<事務局>

- 美術館の学芸員は市の職員なので人事異動はある。企画展などの自主事業は市が行っていて施設の維持管理は指定管理者がやっている。芸術館と音楽文化ホールは指定管理者なので市の職員もいるが主には指定管理者の職員。実際の事業の企画をやっている指定管理者の職員は身分が嘱託職員なので労基法の関係もあり5年で変わってしまうという状況。芸術館の中でもそういう方針を立てて、その中で創造発信するという事で先日も海外公演を行った。政策的にアウトリーチもしているし、松本演劇工場とか若手の劇団養成だとか人材育成もしている。
- 館長制は、今はなくて監督制ということで串田さんは芸術監督。監督は最終的には市長の政策。

【委員】

- 職員の専門性を高めソフト事業に重点を置いたというのはしっかり書いていただきたい。
- スタッフたちが動ける環境をどうつくるか、モチベーションをあげられるかはトップだけの問題ではなく、組織マネジメントの問題。方向性を共有してそこに

進んでいくんだということを目指せばいい。そういう体制にどうしていくかがもうすこしわかりやすく書かれていたらいい。

3ページの(4)イ(ウ)「市民合意が得られるようにする」は「目的に応じて機会を公平に与えます」とか「手段については透明化を図ります」がいい。

- 職員の専門性についてはそこにいる職員の姿勢に依存し、場合によってはここに来る子どもたちの意欲も削いでしまう。職員の意識を高めていただきたい。
- 音文ホールの施設利用、練習場はすごく高い。それはそれなりに効果がある。松本は中学校の吹奏楽のレベルが上がった。サイトウキネンのおかげかもしれない。住んでいる人たちが芸術の都だと思える町にしていきたい。
- 私たち委員の方は市がどうなったら良くなっていくだろうかという方向で、中がどのようにあるべきか、個々がバラバラにならないようにしたい。